

<研究ノート> 蘭溪・麗水の道士たち : 中国浙江省中・南部の調査から

著者	何 彬
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	5
ページ	187-191
発行年	1992-03-31
その他のタイトル	<Research Notes>Taoist Priests in Lanxi and Lishui : Field Report from Central and Southern Zhejiang Province,China
URL	http://hdl.handle.net/2241/14250

研究ノート

蘭溪・麗水の道士たち

—— 中国浙江省中・南部の調査から ——

何 彬[※]

一、地理・概況

浙江省面積の70.4%が山か丘陵である。蘭溪市は中部の丘陵盆地にあり、麗水市は南の山間部にある。交通不便のため、平野、沿海地域と違い、古くからの慣習がかなり保存されている。そのうち、鬼神を盛に信じ、先祖を丁寧^{ていねい}に祭ったりするのが1つの特色であり、1877年に編集された『処州府誌』に書かれたように「俗惟佞巫相沿積習牢不可破。符篆輪回之説衆口艶称以為美談」である。それで日常生活に道士の姿がよく見られるのも当然のことと思われる。

1991年3月～5月の間、両地でフィールドワークをした時運よく、7、8人の民間道士を尋ねた。1950年代以後抑えられて、1960年代の後半姿を消し、今の現行政策に正式に認められていない道士たちは実際に活躍しているも、インタビューされるのになんかの警戒心を持っているため、彼らの生活、民間道士活動の内容などにつき簡単にしか了解することができなかった。次に調査して得た資料を簡単にまとめて見る。

二、5人の道士（本人の心配を考慮して、名前をABCに替える）

道士Y氏：83歳。蘭溪市の名高い民間道士。祖父、父親を継ぎ、16歳中学校卒業後道士活動の手伝いをし、18歳から正式に道士を学んだ。琴・碁・書・画・医・ト・星・相などを学んだ。特別学校の文学学部で4年歴史、地理を習い、中学校の歴史、地理を教えていた。1940年代から定年退職まで漢

方医をした。妻子早亡のため、今弟子の一家と一緒に郊外のM村で暮らしている。

道士Z氏：43歳。蘭溪市S村。幼い時父親から道場、お経、霊屋のことを教わった。36歳結婚して女の子2人いるが、女の子なので道士を継げないと言った。農村改革後、1ム（1ム=1/15ヘクタール）余りの水田を持っているが、豊年に900キロの収穫ができて4人家族1年の食料に足らないので、道士の仕事を副業としている。村に限らず、市内に住んで葬式用の花輪など販売している母親の店にもよく手伝いに行く。

道士C氏：70代。蘭溪市内に住む。サービス業に勤め、現在定年退職。16歳から道士を習ったが、文革中禁止され十数年間やめていた。定年後、人に頼まれて民間道士をやり始めた。自分が本気ではなく、友人に頼まれたので、暇をつぶすつもりで友人の手伝いをしただけだと何回も説明した。

道士ZH氏：73歳。麗水市郊外L生産大隊に住む。14歳から5年間麗水の有名な太保廟に入りおじさんについて道場のやり方、楽器、お経、書画などを習った。19歳から正式に道士をやりはじめた。1949年後道場ををめたにやらず、文革中禁止され、本人も生産大隊で重点に批判されていた。近 years 来の開放政策により香港台湾などから里帰りして墓参りの華僑が増え、ZH氏は活躍してきたが、後継ぎがいなことにかなりの悲観を表した。

道士J氏：74歳、青田県Z村に住む。家代々が道士をして、J氏は14歳から道士仕事を手伝いながら習い始めた。30歳に新中国が成立、道場などが禁止されたため、学校の先生をしてきた。定年退職後、この数年から再び道士をやり始めた。麗水

※北京師範大学中文系博士課程

市に近いので、よく頼まれて、麗水市へ道場をやりに行く。

三、道士の仕事

a, 称呼 道士のことを「道士」「道士先生」又は「師公」と呼ぶが「道士先生」がもっとも一般的のようである。

b, 仕事の内容 一言で言えば、亡者のために「道場」をやることは道士の主な仕事である。道場は行う時期、規模により「仏事」「功德」「開喪」などに分けられているが、第四節で詳しく述べる。道場は規模の大小を問わず必ず仏教のお経を読む。道場の規模、性質により「救苦経」・「血湖経」・「勸亡魂経」・「金剛経」・「弥陀経」・「十王懺」・「地獄懺」などの一部かすべてを誦む。

c, 「仏道一家」 なぜ道士が道場をやる時、お経を誦むかと尋ねたら、回答は民間に仏道一家、もともとは亡者のための道場は仏教の仕事で、和尚を家まで呼ぶか廟で和尚にやってもらい、魔よけ、鬼払い、病気にかかった時の魂呼びなどが道士の仕事であった。宋の時代までは「道不度亡、僧不設醮」であったが明の時代から「道也度亡、僧也設醮」になってきた。1949年後和尚の数はかなり減り、現在、限られた有名な廟のほかは和尚はほとんどいないので、道士は最初の和尚の協力者の立場から完全に和尚の仕事を替わりにやるようになった。七人の道士での道場は昔七人の和尚であって、いまでも七人の道士のうち一人が袈裟を着るのがその名残りである（ZH氏、Y氏）。「民間に仏道一家」につきもう一つの解釈がある：和尚に錫の杖があり、道士に「仏法僧宝」の印がある。道場をやる時、和尚の杖で「地獄」「血湖」をつぶし、道士の印であの世へ送る「牒文」に判をつく。この地方の民間俗語で形容されたように「和尚没印、道士没柄」なので、和尚道士共に道場をやらなければならない（J氏）。

d, 経書・「十殿閻羅」 訪ねられたこの数人の道士の持っている経書のすべてが手書きのものであり、それに、見せてもらったら、同一経名のも

のに言葉か字の違った所がある。その原因は、経書が戦争の時紛失したり、1960年代後半の文革時代に焚かれたりしたので、1980年代から道士たちは天台山など仏教の名山から経書を写したり（J氏）、友人か他人の持っているあるいはどこからか写してきたお経をまた写したり（C氏、ZH氏）、または暗記の「腹経」を書き出したりする（Y氏）ことにある。写し、また写しと暗記によったお経の言葉は文字の間違えが避けられないことだと思われる。C氏はノート4冊、J氏はノート3冊、Y氏はノート13冊を見せてくれた。そのうち、C氏の持っているお経は[清]光緒11年の経書から写してきたので、亡者の名前を言う時「大清国浙江省金華府蘭溪県……」のような言葉をまず言う。

道場をやる時、あの世を描いている掛け図がよく掛けられる。伝統的な掛け軸のような幅の大きい地獄の絵が十枚1セット（俗に「十殿図」と呼ばれる）となり、罪のある人たちはそれぞれの地獄で罰せられ、7枚目に「奈何橋・金橋・銀橋」が描かれ、悪人のみ「奈何橋」を渡る。十枚目に



十殿図、十殿の一部；孟婆亭と迷魂湯
（浙江省蘭溪市）

「孟婆亭」があり、人々は孟婆の迷魂湯を飲んで、すべてのことを忘れてまたこの世に生まれる。Y氏は80数年前の「十殿図」を保存しているが、色がかかなり落ちて絵がはっきり見えなくなったため、8年前自分でまた新しく書き直した。3カ月もかかった。ZH氏、J氏も十殿図を持っているが、道場をやる場所がせまくて、十殿図を掛け切れない場合もあるので、J氏は2枚セットの十殿図も持っている。これらの図もすべて手書きのものである。(写真参照)

四、道場

a, 名称と区別 前節に少し触れたが、道場は行う時期と規模により呼び方もやり方も違い、道場・功德・仏事・開喪など呼び分けられている。

道場—亡者のために行う行事の総称であり、麗水あたりでは、死後数年死者のために行う規模の大きい行事のみ指す。蘭溪市では人が亡くなって家に3日間か5日間か7日間置き、埋葬(市内在住は火葬)する前日の夜、道士を呼んで道場〔成服道場とも呼ぶ〕をやってもらう。道士1人の場合「救苦経」(死者が男性)、「血盆経」(死者が女性)をよみ、20分から数時間かかる(C氏、Z氏)。6、7人の道士ならお経を誦むほかテーブル三つを品字形に重ね、そのうえ白布を敷いた「奈何橋」(蘭溪郊外のY村と蘭溪市一部で腰掛け二つに木の板を置いて白布を敷く)を、死者の子孫3、5人をつれて渡る行事もし、一晚かかる(C氏Y氏)。麗水市の道場は1日2晩か2日3晩続いてやり、7日間続く例が昔にあった(ZH氏、J氏)。道場をやることを「做道場」、「做功德道場」、「做功德」、「打道場」(蘭溪)などと呼ぶ。麗水市内における1991年4月2日の道場内容は次のとおりであった：

原因：三人兄弟の徐氏の2人のお兄さんが母親の20周忌と父親の90歳「陰寿」のため、

数十年ぶりに台湾から帰り、功德道場に参加する。

規模：道士7人(楽器持ち)、和尚1人(袈裟を着る)。4月2日夜9時ごろから4月4日夜11時ごろまで続いた。(4月5日清明節であり家族全員が墓参りをする)

内容：4月2日夜「申文」をよむ 2時間・「破地獄」をする(蘭溪で打城とも言う)：ござに赤い布を敷く、和尚が米を使いその上で地藏菩薩の絵を書く。周囲に東・南・西・北・中と書いた5つの瓦を置き、お線香と蠟燭をたてる。お線香を手にした徐氏親族全員が世代順(同世代なら男性が先女性が後)で1列になり、お経(地獄懺)をよみながら地藏図を回る和尚の後ろにつき、歩いたり拜んだりする。何回も繰り返した後、しばらく休憩する。その後和尚さん1人で図をまわり、1回りごとに錫の杖で地獄を象徴する瓦1つをつき潰す。2時間かかる。

4月3日朝 4時から「献天」法事(天から24人の神様を招く)をする。1時間余りかかる。

昼 午後法事をし、お経(金剛經・弥陀經・血盆經・心經・枉生咒・大悲咒)を誦む。

夜 お経をよみ、夜10時すぎ「破血湖」をする：破地獄と同じようにまずござに赤い布を敷き、地藏の絵を米で書く。絵の周囲を焼き物の小皿5つ置き皿に黒砂糖入れの水を入れる。次男が跪いて「十宝」(線香・花・蠟燭・水・果物・茶の葉・米・宝・真珠・衣)を神様に捧げる。和尚が「血湖

表」(徐氏の母親の生と死の日、時間、息子の名前など)を読み、嫁さん数人が和尚の両側に跪く。読まれた血湖表を若干の紙銭と一緒に玄關で焼く。しばらく休憩した後、嫁たちは横で跪き、息子、孫はお線香3本を手にし、1列になって和尚について地藏菩薩の図を回りながら拝む。その後、長男は1まわりをすること1皿の水を飲み、口で小皿をさかさまにして、和尚は錫の杖で血湖を象徴する小皿をつき潰す。5回繰り返す。2時間余りかかる。

4月4日昼 「十王懺」をよむ。4時間半かかる。

午後 「放赦」(俗に放水灯という)法事をする：午後6時半、楽器を演奏する道士、和尚、息子、嫁、孫の順で列になって、大水門という麗水市南の港まで行く。川面に面してお線香とおかず、お茶を供え、和尚がお経をよむ。数百メートル離れる川の上流の舟から108個の「水灯」(藁1束を輪にして、お線香と蠟燭がさしてある)に火をつけて水面に置く。水灯が近付くと爆竹をやる。水灯が殆ど遠く流れて行くと、専用の「紙碼」を燃やし、供え物を川に流す。1時間ぐらいかかる。

夜 「施孤」をする：お粥を木製のバケツいっぱい入れ、2人で担ぎ、外で1回りをする。道ばた、川辺、橋の両端などでお粥を少しずつ置き、お線

香、蠟燭1本ずつ立てる。あの世の「野鬼」(無縁仏)たちに自分の亡き両親の面倒を見てもらうという意味だそうである。「放焰口」法事をする：夜9時半から和尚はしばらくお経「瑜珈焰口」をよみ、お線香3本手にした長男次男をつれて「三宝台」(如来の掛け図3枚が掛け、その前のテーブルにお線香、蠟燭、おかずいっぱい供えてある)に向かいおじぎして拝んだり跪いて拝んだりする。お線香を手にする和尚は先、長男次男3男後ろにつき各部屋を1回りをする。和尚は重ねたテーブルにのほりお経を誦んだり歌ったりする。2時間ぐらいかかる。

功德 — 功德道場の略称であり、人が亡くなって数年後死者の魂を家まで招き、盛大に行事をやり、あの世の専用のお金「銀錠」(錫箔か紙でつくった元宝形のもの)をたくさん焼いてあげる行事のことをさす。盛大にやらなければ、死者が受け取れないと麗水市に住む昔お棺かつぎを職業をしていた82歳の楊氏が言った。前節の麗水市内徐氏の家で行った道場の全称が「折日申文献天誦経礼懺供王焰口功德」であった。

仏事 — 死者周年忌の時の行事。蘭溪ではこのように区別しないようである。麗水の習俗では冬至、清明節が各種の道場を行う最適の時期である。「道場」「功德道場」との区別としては、規模が小さい、お経を誦む数が少ないそうである(J氏)。麗水市内における1991年4月3日の「仏事」：

原因：母親10周忌、父親1周忌。

道士：4人。

お経：破地獄、破血湖、心経、金剛経、弥陀経、十王懺、二時科文、放焰口。

そのほかに、あの世のお金（銀錠）とあの浙江省の衣服—紙でつくた靴、衣類を用意して最後に燃やしてあの世へ送る。

開喪—麗水に住むお棺担ぎを職業をしていた82歳の楊氏から「開喪」のことを教えてもらった。人が亡くなりお葬式するとき、和尚と道士を呼び、お経をよんでもらう。和尚1人道士数人と和尚1人道士1人でやるが、現在和尚が簡単にさがせないのですべてが民間道士がやる。3日かかるそうで、死者は男性の場合「破地獄」、女性の場合「破血湖」、そのほかのお経、懺などもよんでもらう。「開喪」が死者を送別することで、やらなければならない。経済面に条件がなければ、死者の魂に家に帰ってもらって祭る功德道場はやらなくても構わないが、死者を家から送り出す「開喪」は必ずやるそうである。

b, 意義と目的 道場をやる意義が二つある：

(1), 心理的に親孝行する。親が財産を子孫に残しあの世へいったので、子孫が道場か仏事をやり親の恩に酬いる。いわゆる「孝順」のことである(J氏, ZH氏)。経済的に豊かになっても親のために功德道場をやらないと世間の輿論に責められる(ZH氏)。

(2), 社会的に道場をやることにより、遺産の相続が合法になる：法律上に親が亡くなったら子孫が遺産を自然に相続するが、親のために道場をやらなければ、世間的に相続の合法性が認められない(J氏)。前に述べた徐氏の家の功德道場の1日目に「申文」をよむが、そのうち「墳庫報本」を読むのが1つの内容であった。この赤い紙に道

場に費用を出して参加した家族親族全員の名前を書いた「墳庫報本」が昔、遺産分けの証拠になっていた。むかし、息子、未亡人、側室、また女性が再婚してつれてきた息子たちの誰かが道場をやると誰かが遺産を相続するそうである(ZH氏)。

五、結び

蘭溪、麗水あたりでは、道士が活躍し道場が盛んに行われている。それは、昔からこの地方の人々が鬼巫を信じる風習があることと道場の道徳的な意義（孝順）、功利的な意義（遺産相続の合法性が認められる）をもっているためであろう。

民間道士の存在と道場をやるのが正式に認められていないようであるが、この数年、非公開から半公開的となってきた。近年、台湾香港の華僑が里帰りして親のために道場をやることは政府に許されるので、一般の民衆もやるようになってきた。1950年代までは道場はごく少数のお金持ちの家しかやれなかったそうである(ZH氏)が、近年の経済改革により人々が経済的に豊かになってきたので、文革前よりは道場が盛んに行われるわけである。

和尚の仕事である道場を道士がかわりにやり、時々道士が袈裟をきてやることは、「民間では仏道一家」であり、一般民衆は宗教信仰を厳しく区別せず、この地方の民間信仰の一つとしての特徴を現した。また、この地方では道教、民間道士の影響が仏教よりかなり大きいことも教えてくれた。

蘭溪市と麗水市は道場の呼び方、やり方、奈何橋の造り方などが違うことと手書きの経書にはいろいろな違いがあることから民間道士の活動は組織的ではなく、道場をやることも統一されていない現状が少しわかったのである。(1992年1月15日)